

## 第4章 鎌倉時代から明治にかけての琉球

### 第5節 琉球初の正史「中山世鑑」について

琉球王国の正史「中山世鑑」には、折口信夫の説と同じような琉球王国の始祖・[舜天](#)が日本人であると窺わせる源為朝伝説を書いているので、この節では、そのことについて述べる。

琉球王国の正史『中山世鑑』（1650年に成立）や、『おもろさうし』（1623年成立）、『鎮西琉球記』、『椿説弓張月』などでは、12世紀、源為朝（鎮西八郎）が現在の沖縄県の地に逃れ、その子が琉球王家の始祖舜天になったとされる。真偽は不明だが、正史として扱われており、この話がのちに曲亭馬琴の『椿説弓張月』を産んだ。

[なお、『中山世鑑』が編纂される50年ほど前に僧侶の袋中（たいちゅう）によって書かれた『琉球神道記』には、既に為朝琉球渡りが登場している。](#)

[日琉同祖論](#)と関連づけて語られる事が多く、この話に基づき、大正11年には[為朝上陸の碑](#)が[今帰仁](#)に建てられた。表側に「上陸の碑」と刻まれて、その左斜め下にはこの碑を建てることに尽力した東郷平八郎の名が刻まれている。

日琉同祖論は、日本人と琉球（沖縄）人は、その起源において民族的には同一であるとする説。日琉同祖論は、歴史的には16世紀の京都五山の僧侶等によって唱えられた源為朝琉球渡来説に端を発し、それが琉球へ伝わり17世紀に摂政・羽地朝秀が編纂した『中山世鑑』に影響を与えて、明治以降は沖縄学の大家・伊波普猷によって詳細に展開された。

第1章と第2章に述べたように、琉球王国の人々と私たち日本人は同じ民族である。ただし、琉球王国の人々が正式に日本国民となったのは、琉球処分の後になってからである。琉球王国の人々と私たち日本人は同じ民族であるとの認識は、学識の高い京都五山の僧侶等にも琉球王国の識者にもあったに違いない。

『中山世鑑』を編纂した羽地朝秀は、摂政就任後の1673年の仕置書（令達及び意見を記し置きした書）で、琉球の人々の祖先は、かつて日本から渡来してきたのであり、また有形無形の名詞はよく通じるが、話し言葉が日本と相違しているのは、遠国のため交通が長い間途絶えていたからであると語り、王家の祖先だけでなく琉球の人々の祖先が日本からの渡来人であると述べている。

また、琉球王国の正史「中山世鑑」にはいわゆる創世神話も書かれているので、その点について触れておきたい。

沖縄諸島地域は長らく、日本とは別の琉球王国としての歴史を歩んできたが、その中で民族の創始などを伝える神話もまた「古事記」や「日本書紀」を代表とする大和の王権の持つ神話とは別の神話を有していた。王国レベルにおける世界創世・人類起源を伝える神話は、太陽の神が下界に「アマミキヨ・シネリキヨ」（「阿摩美久」）の神を送り、国造り、島造りを命じたとするものである。また、この2神は島々を作った際に、王国の祭祀にかかわるいくつかの聖地もつくったとされている。斎場御嶽（せいふあーうたき）や久高島のクボー御嶽など、それらは今でも崇拝の対象となっている。その後、アマミキヨは天から人間の種と五穀の種を地上にもたらしたとされている。これらのいわば「公式」の神話は沖縄本島中部にはじまりをもつ琉球王朝によって、「おもろそうし」や「中山世鑑」といった17世紀半ばに記された書物において体系的にまとめられたのである。

一方で民間レベルにおいても、それぞれの地域や島にさまざまな創世神話、宇宙開闢神話が残されている。例えば宮古島には、島を代表する聖地である「漲水御嶽」にまつわる神話として、「クイツヌ・クイタマ」の2神による始祖神話が伝えられている。沖縄本島北部の離島古宇利島には、裸で暮らしていた一組の男女が生殖と羞恥心を知り、その子孫が沖縄諸島の人々となったという「アダムとイブ」のような言い伝えが残されている。王国の神話と同様に、天界から人間や五穀の種が齎され、その種が土にまかれることで人が生まれる（＝人が土の中から生まれる）といった神話も宮古や石垣島に残されている。そういった状況の中で、先島（宮古・八重山）地方には「兄妹始祖洪水神話」が数多く残されており、注目されている。これらは、何らかの原因でその土地に辿り着いた、兄妹の関係にある一組の男女がその土地の始祖となるという神話である。

沖縄にこれだけ多くの神話が残されているということは、まことに特異なことで、**琉球列島が大和朝廷の歴史書・古事記の影響を受けたということではなく、双方がいずれも同じ系列の下にある神話だということを示すものである。琉球列島及び大和朝廷の神話のルーツは、第2章第4節で述べた黒潮文化圏（パプアニューギニア、ハワイ、インド、ラオスとタイ、オーストラリア、ニューヘブリデス諸島）にあり、アイヌ神話と同じルーツを持っている。**

**埴原和郎**は、アイヌも和人も縄文人を基盤として成立した集団で、共通の祖先を持つが、本土人は、在来の縄文人が弥生時代に大陸から渡来した人々と混血することで成立した一方、アイヌは混血せず、縄文人がほとんどそのまま小進化をして成立したとしている。アイヌは、大和民族に追われて本州から逃げ出した人々ではなく、縄文時代以来から北海道に住んでいた人々の子孫とされる。

第2章第2節で詳しく述べたように、北海道の[有珠モシリ遺跡](#)や[虻田町の入江貝塚](#)から、鬼界島カルデラの大噴火の際、西日本本土のみならず北海道まで逃げて行った人たちがいたことがわかる。それらの中には、そのまま北海道に居続けてアイヌの祖先となった人たちがいた。なお、鬼界島カルデラの大噴火の際に東北に移住した人たちがいたかもしれないし、その後、北海道から東北に移住した人たちがいたかもしれない。そういう人たちは、旧石器時代からもともといた人たちと混血を重ねながら、高度な縄文文化を育てていった。その遺跡の一つに三内丸山遺跡がある。その後、それら東北縄文人は大和朝廷に服さないために、大和民族からは蝦夷と蔑視されたのである。